

歴代誌第二14－17章「拠り頼む困難」

1A 大軍への対峙 14

1B 主からの平安 1－8

2B 圧倒的勝利 9－15

2A 警告への応答 15

1B ご自身を示される主 1－7

2B 主への忠誠 8－19

3A 小事への対応 16

1B 人間の手法 1－6

2B 主を求めない愚行 7－14

4A 持続的復興 17

1B 異教からの防御 1－9

2B 他国からの信頼 10－19

本文

歴代誌第二 14 章を開いてください。ユダ王国、ソロモン後の王国は、ソロモンが導入した偶像礼拝をどう処理するかが最も大きな課題でありました。レハブアム、そしてアビヤの治世においては、そのままにされていました。けれども、次の王アサとその後のヨシャパテにおいて、その取り除きが始まります。14 章から 16 章までがアサの治世、17 章から 20 章までがヨシャパテの治世ですが、今日は 14 章から 17 章までを学びたいと思います。ここの箇所でも共通している課題は、「主に拠り頼むことの困難」です。主に拠り頼むこそが安息を得られるのですが、なぜそうすることを私たちが避けてしまうのか、このことを考えてみたいと思います。

1A 大軍への対峙 14

1B 主からの平安 1－8

14:1 アビヤは彼の先祖たちとともに眠り、人々は彼をダビデの町に葬った。彼の子アサが代わって王となった。彼の時代には、この地は十年の間、平安を保った。

レハブアムの治世でエジプトのシシャクがユダを攻めてきて以来、国は外国の勢力の脅威にさらされていました。けれども、アサの治世の初めの十年間、平安が保たれていました。その理由が次にあります。

14:2 アサは、彼の神、主がよいと見られること、御目にかなうことを行ない、14:3 異教の祭壇と高き所を取り除き、柱を砕き、アシェラ像を打ちこわした。14:4 それから、ユダに命じて、彼らの父祖の神、主を求めさせ、その律法と命令を行なわせた。14:5 さらに、彼はユダのすべての町々から高き所と香の台を取り除いた。こうして、王国は彼の前に平安を保った。

平安が保たれていたのは、主によいと見られることを行なったからです。異教の祭壇を取り除きました。高き所というのは、イスラエルに行くとその遺跡がいろいろなところにあります。地面よりも少し高くしてそこに祭壇を築いて、神々をあがめていたところ。そして、アシェラとはバアルの母であり、豊穡の女神です。性的倒錯がアシェラの名によって行われていました。これらを取り除きました。ユダの民に主を求め、また律法を行わせました。それで、王国が平安を保ったのです。

14:6 彼はユダに防備の町々を築いた。当時数年の間、その地は平安を保ち、主が彼に安息を与えられたので、彼に戦いをいどむ者はなかったからである。14:7 彼はユダに向かってこう言った。「さあ、これらの町々を建てようではないか。そして、その回りに城壁とやぐらと門とかんぬきを設けよう。この地はなおも私たちの前にある。私たちが私たちの神、主を求めたからである。私たちが求めたところ、神は、周囲の者から守って私たちに安息を下された。」こうして、彼らは建設し、繁栄した。

アサは、防備の町々を築きましたが、防備の町々に拠り頼むことはしませんでした。防備の町を造っているから安全なのではなく、主を求めたから神が安息を下されたと言っています。この姿勢はすばらしいですね。ちょうどこれは、確かに生命保険に加入して、主から与えられている財産を賢く用いるということを行なってもよいですが、主が自分の生命の保障をしてくださると確信しているのと似ています。

そして主が周囲の者から守って安息を下されたという言葉は、かつてダビデに与えられた言葉でもありました。ソロモンに引き継がれましたが、彼の晩年の背信行為によってそれがなくなっていきました。けれども、主が回復させてくださっています。そうです、私たちは一度失ってしまっても、アサのように悪から立ち上がり、主に立ち上がることをするならば、主は恵みをもって回復してくださいます。

14:8 アサには、ユダの、大盾と槍を帯びる軍勢が三十万、ベニヤミンの、盾を持ち、弓を引く者が二十八万あって、これらすべてが勇士であった。

アサにはしっかりとした勇士がこれだけの人数がいましたが、しかしこれをはるかにしのぐ軍勢が外国からやってきます。

2B 圧倒的勝利 9-15

14:9 時がたって、クシュ人ゼラフが、百万の軍勢と三百台の戦車を率いて、彼らに向かって出陣し、マレシャにまで寄せて来た。14:10 そこで、アサは彼に対抗して出陣し、マレシャにあるツェファテの谷で戦いの備えをした。

クシュとはエチオピアのことです。今のエチオピアだけでなく、エジプトの南部、そしてエジプトの南に位置するスーダンを含む大きな国でした。けれども、おそらく彼はエジプト第二 22 王朝のシシャクの息子オソルコン一世の総督だと思われます。クシュ人ではありますが、エジプト王朝に仕えていました。そして彼が、マレシャのツェファテの谷で戦いの備えをしました。ツェファテの谷は、南のラキシユの谷と

北のエラの谷の間にある谷です。2013年のイスラエル旅行で私たちは、ダビデとゴリヤテの戦いの場エラの谷に行く途中で通過しました。ですから、かなりユダ国の中に侵入してきました。

14:11 アサはその神、主に叫び求めて言った。「主よ。力の強い者を助けるのも、力のない者を助けるのも、あなたにあっては変わりはありません。私たちの神、主よ。私たちを助けてください。私たちはあなたに拠り頼み、御名によってこの大軍に当たります。主よ。あなたは私たちの神です。人間にすぎない者に、あなたに並ぶようなことはできないようにしてください。」

この大胆な祈りができたのは、午前礼拝で学びましたが、彼が主と共に歩んでいたからです。主と共に歩む中で起こった問題ですから、主が引き起こした問題であり、だから主が責任を取ってくださいます。私たちに大切なことは、もっぱら主と共にいることです。主の側についていることです。そうすれば、主が助けてくださいます。

14:12 主はアサの前とユダの前に、クシュ人を打ち破られたので、クシュ人は逃げ去った。14:13 アサおよび彼とともにいた民は、彼らをゲラルまで追いつめた。クシュ人は倒れ、生きている者はなかった。主の前、その宿営の前に、打ち砕かれたからである。そこで、彼らは非常に多くの分捕り物を持ち帰った。14:14 さらに、彼らはゲラル周辺のすべての町々を攻め打った。主の恐れが彼らに臨んだからである。そこで、彼らはすべての町々をかすめ奪った。その中には多くの獲物があつたからである。14:15 また、彼らは家畜の天幕も打ち、多くの羊とらくだを奪い去って、エルサレムに帰って来た。

ゲラルは、さらにエジプト方面に南下したところにある町です。かつてシシャクが攻め取った町々をこのようにして奪還しました。ここで彼らが打ち勝ったのは、「主の恐れが彼らに臨んだから」だ、とあります。このように勝利は、もっぱら主がもたらされるものです。私たちが、主が興してくださる御業を主にすがりながら待ち望む必要があります。

2A 警告への応答 15

1B ご自身を示される主 1-7

15:1 すると、神の霊がオデデの子アザルヤの上に臨んだ。15:2 そこで、彼はアサの前に出て行き、彼に言った。「アサおよび、すべてユダとベニヤミンの人々よ。私の言うことを聞きなさい。あなたがたが主とともにいる間は、主はあなたがたとともにおられます。もし、あなたがたがこの方を求めるなら、あなたがたにご自身を示してください。もし、あなたがたがこの方を捨て去るなら、この方はあなたがたを捨ててしまわれます。」

アサには一つに霊的危機が訪れました。それは、クシュ人との戦いで大いなる勝利を主が与えられた後、その勝利に酔いしれて主を忘れてしまうという危機です。これだけ主によりすがったアサが、どうしてこんな警告を受けなければいけないのか？と思います。けれども、主はアサの心を彼自身が知っている以上に知っています。主が警告を与えられる時は、自分では大丈夫だと思っけていてもそれを聞くべきなのです。神は無駄にご自分の言葉を発しておられるのではありません。立ち止まって、その

言葉に聞き、そして自分の心を探るのです。聖霊が、確かに今、この言葉を聞くべきだったことを悟らせてくださいます。「きちんとできていますから、心配しないでください。」という態度が危険であります。

そして、この警告の言葉自体ですが、「あなたがたがこの方を捨て去るなら、この方はあなたがたを捨ててしまわれます。」であります。これは基本的、根本的な真理です。私たちが主を捨てれば、私たちも捨てられます。以前、イエスを自分の救い主として受け入れたのであれば、今、「私はイエスを知らない」と言っていたら、その人は元々救われていなかったのか、それとも信仰から意図的に離れたのか分かりませんが、イエスを知らないと継続的に言っている人が神の御国に入ることはありません。コリント第一 5 章で、正しくない者は神の国を相続しないと書いています。

15:3 長年の間、イスラエルにはまことの神なく、教師となる祭司もなく、律法もありませんでした。15:4 しかし、その悩みのときに、彼らがイスラエルの神、主に立ち返り、この方を尋ね求めたところ、彼らにご自身を示してくださいました。15:5 この時期には、出て行く者にも、はいつて来る者にも平安がありませんでした。国々に住むすべての人々に大きな恐慌があったからです。15:6 そして彼らは、民は民に、町は町に相逆らい、共に打ち砕かれてしまいました。神があらゆる苦しみをもって、彼らをかき乱されたからです。15:7 しかし、あなたがたこそ強くあってほしいのです。力を落としてはなりません。あなたがたの働きには報いが伴っているからです。」

アザルヤは、おそらく士師の時代のことを思い起こさせているのでしょう。めいめいが自分の目に正しいと思うことを行っていた時には、混乱と混沌、そして恐怖と争いしかありませんでした。主を捨てたらこのようなことになってしまう、だから今また、主によりすがってほしい、さらなる宗教改革を行ってほしいと要請しています。

ここで大事な言葉は、「彼らにご自身を示してくださいました」というところです。主は、ご自身を示したいと願われています。その栄光と力を示したいと願われています。けれども、そのためにはご自分の心をつにす人々が必要です。主を熱心に尋ね求める人が必要です。さもなければ、主は裁きによってのみしかご自分の栄光を示すことができません。主が、私たちのために何もしないと決めておられるわけではありません。むしろ、私たちが主に対して心を開いていないのです。ですから、尋ね求めることが必要なのです。

2B 主への忠誠 8-19

15:8 アサは、これらのことばと預言者オデデによって預言されたことを聞いたとき、奮い立って、ユダとベニヤミンの全地から、また彼がエフライムの山地で攻め取った町々から、忌むべき物を除いた。そして、主の玄関の前にあった主の祭壇を新しくした。15:9 さらに、彼はユダとベニヤミンのすべての人々、および、エフライム、マナセ、シメオンから来て彼らのもとに身を寄せている人々を集めた。彼の神、主が彼とともにおられるのを見て、イスラエルから多くの人々が彼をたよって来たからである。

アサは、この警告の言葉を自分の悟りに頼らず、そのまま受け取りました。そこでまだたくさん残って

いた忌むべき物を取り除く作業を行いました。そして大事なのはそれだけではありません。肝心の主に対する祭壇を新しくしたのです。私たちが、偶像礼拝や他の罪を避けるのに一生懸命になっても、肝心の主に対する礼拝が形式的になっては、元もこうもありません。アサはその最も大切なところも改革しました。そして、父アビヤの時代にヤロブアムから攻め取ったエフライム山地の町々にあった忌むべき物も取り除いたのです。これは北イスラエルとの境にあるところですから、危険を伴いますが、けれども勇気を出して敢行しました。

そして素晴らしいのは、さらに北イスラエルからまことの神をあがめたいと願った人々が、ユダのほうにやってきたことです。レハブアムの時に、ヤロブアムが金の子牛を拝ませた時に一部のイスラエル人が南に下ってきましたが、今度もさらに下ってきました。これが、真の統一につながります。肉の戦争ではなく、霊の戦争に勝利することによって一つになっています。主への礼拝によって人々が一つになることができるのです。

15:10 こうして、アサの治世の第十五年の第三の月に、彼らはエルサレムに集まった。15:11 その日、自分たちが携えて来た分捕り物の中から、牛七百頭と羊七千頭を主にいけにえとしてささげた。15:12 さらに、彼らは、心を尽くし、精神を尽くしてその父祖の神、主を求め、15:13 だれでもイスラエルの神、主に求めようとしない者は、小さな者も大きな者も、男も女も、殺されるという契約を結んだ。15:14 それから、彼らは、大声をあげ、喜び叫び、ラッパと角笛を吹いて、主に誓いを立てた。15:15 ユダの人々はみなその誓いを喜んだ。彼らは心を尽くして誓いを立て、ただ一筋に喜んで主を慕い求め、主は彼らにご自身を示されたからである。主は周囲の者から守って彼らに安息を与えられた。

ものすごいリバイバルです。霊的復興です。主に誓いを立てました。偶像礼を行う者だけでなく、主に対して無関心な者も殺すという契約はちょっと過激ですが、それでも、ただ一筋に喜んで主を慕い求めたのです。すると主が彼らにご自身を示してくださいました。パウロが若い牧者テモテに、こう勧めました。「あなたは、若い時の情欲を避け、きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。(2テモテ 3:22)」

15:16 アサ王の母マアカがアシェラのために憎むべき像を造ったので、彼は王母の位から彼女を退けた。アサはその憎むべき像を切り倒し、粉々に砕いて、キデロン川で焼いた。15:17 高き所はイスラエルから取り除かれなかったが、アサの心は一生涯、完全であった。15:18 彼は、彼の父が聖別した物と、彼が聖別した物、すなわち、銀、金、器類を、神の宮に運び入れた。15:19 アサの治世の第三十五年まで、戦いは起こらなかった。

とても難しいのは、家族の中での宗教改革です。教会の中で罪を犯している者、悔い改めない者を裁くことはとても大変ですが、それよりも大変なのは自分の家族で罪を犯している者がいる時です。しかし教会のためにも、そして何よりも主の栄光のために行わなければいけません。アサはこれも敢行しました。そして、神の宮から以前、シシャクによって運び出された金銀の器ですが、新たに聖別したものを宮の中に運び入れました。そして第三十五年まで戦いが起こらなかった、と言います。初めの

十年間が安息があったと 14 章 1 節にあり、それからクシュ人が攻めてきたので、二十年以上は平和な状態が続いていました。

3A 小事への対応 16

そして、アサの治世の最後の最後で、極めて残念な出来事が起こります。

1B 人間の手法 1-6

16:1 アサの治世の第三十六年に、イスラエルの王バシヤはユダに上って来て、ユダの王アサのもとにだれも出入りできないようにするためにラマを築いた。

敵は外国ではなく、兄弟イスラエルからでした。バシヤ王がラマを築きました。ラマは、ベニヤミン領にあります。その目的は、アサのもとにだれも出入りできないようにするためだとあります。つまり、エルサレムに行って主を礼拝するものが出てこないように、ということです。

16:2 アサは主の宮と王宮との宝物倉から銀と金を取り出し、ダマスコに住むアラムの王ベン・ハダデのもとに送り届けて言った。16:3 「私の父とあなたの父上の間にあったように、私とあなたの間にも同盟を結びましょう。ご覧ください。私はあなたに銀と金を送りました。どうか、イスラエルの王バシヤとの同盟を破棄し、彼が私のもとから離れ去るようにしてください。」16:4 ベン・ハダデはアサ王の願いを聞き入れ、自分の配下の将校たちをイスラエルの町々に差し向けたところ、彼らはイヨンと、ダンと、アベル・マイム、および、ナフタリに属するすべての倉庫の町々を打った。16:5 バシヤはこれを聞くと、ラマを築くのを中止し、その工事をやめさせた。16:6 アサ王はユダの人々をみな連れて行き、バシヤが建築に用いたラマの石材と木材を運び出させたうえ、これを用いてゲバとミツパを建てた。

なんとアサは、主に呼び求めないで、外国であり、敵であるアラム、つまりシリアの王に神の宮の金銀を送ってしまいました。彼は、主に呼び求めないで、自分の戦略と思惑で動きました。そして実際に、この条約破棄の策略でバシヤはラマを築くのをあきらめました。ゲバとミツパもベニヤミン領にありますが、そこを築いて北からの侵入を補強しました。

アサがなんでこんな風になってしまったのでしょうか？これは、アサ自身が発した信仰の言葉に答えがあります。「力の強い者を助けるのも、力のない者を助けるのも、あなたにあっては変わりはありません。(14:11)」力のある者を助けることについては、アサは主に拠り頼みました。クシュ人の圧倒的な軍勢に対しては、主を呼び求めたのです。しかし、力のない者、バシヤについては、自分で対処できると思ったのです。

これが恐ろしいことです。15 章にあったアザルヤの預言にある言葉であります。成功して、繁栄した後には必ずこの危機があります。主にあって霊的勝利を収めた後には必ずこの危機があります。自分が克服したい問題や課題があります。それを主が乗り越えさせてくださいました。それで主はすばらしいと喜ぶのですが、その勝利に酔って、自分で対処できるとしてしまうのです。祈ることを忘れま

す。すべては主から来ていることを忘れます。だから、すべての思い煩いを主にもっていくのではなく、だいたい自分で対処できるから小さな事は任せておいて、という恐ろしい態度に変わってしまいます。

2B 主を求めない愚行 7-14

16:7 そのとき、予見者ハナニがユダの王アサのもとに来て、彼に言った。「あなたはアラムの王に抛り頼み、あなたの神、主に抛り頼みませんでした。それゆえ、アラム王の軍勢はあなたの手からのがれ出たのです。16:8 あのクシュ人とルブ人は大軍勢ではなかったでしょうか。戦車と騎兵は非常におびただしかったではありませんか。しかし、あなたが主に抛り頼んだとき、主は彼らをあなたの手に渡されたのです。

ハナニという先見者が来ました。後に彼の息子エフーも預言者となって、バシヤに対して、またヨシャパテに対して預言を行ないます(1列王 16:1、2歴代 19:2)。ハナニが語ったのは驚くべきことでした。それは、主の御心はアラムをアサによって倒すことでした。アサは、イスラエルが敵だと思っていました。しかし違うのです、主はもっと大きな敵、アラムつまりシリヤを倒すことを御心としていたのです。アサは、神の全能の力と壮大な救いの計画をあまりにも過小評価していたのです。

これを私たちは、キリスト教会にも当てはめることができるかもしれません。コリントにある教会の問題を私たちは修養会で学びました。仲間割れという問題がありました。神が人を成長させてくださることを見るのではなく、神と共に働く人々、その働き人に目を留めて、私は誰々につくという人間中心で動いていました。キリスト教会は、あくまでも世における光であり、世に対して目が向けられていなければいけないのに、内部の、自分が敵だと思ふ人々に向けられていきます。そして、アサのように、人間的な対処法、世的な方法に抛り頼んでその問題を対処しようとするのです。アサが、兄弟イスラエルを、敵であるシリヤを利用して叩くことを行なってしまうのです。

16:9 主はその御目をもって、あまねく全地を見渡し、その心をご自分と全く一つになっている人々に御力をあらわしてくださるのです。あなたは、このことについて愚かなことをしました。今から、あなたは数々の戦いに巻き込まれます。」

私は、午前礼拝の説教で、どこを本文にすればよいか迷いました。三つの箇所がありました、一つは今朝話した、14章 11節です。そしてもう一つは 15章 2節です。「あなたがたが主とともにいる間は、主はあなたがたとともにおられます。もし、あなたがたがこの方を求めるなら、あなたがたにご自身を示してください。もし、あなたがたがこの方を捨て去るなら、この方はあなたがたを捨ててしまわれます。」の箇所です。そしてもう一つがここ、16章 9節です。

主は今でも、ご自分の目をもってあまねく全地を見渡しておられます。主の御心はいつでも、「神は、実にその独り子をお与えになったほどに世を愛された」であります。世界を愛しておられます。どれほどか？独り子をお与えになったほどに愛されました。この愛、人を罪の滅びから救い、永遠のいのち、永遠の御国の中に入れることを願って、そのことを全地に示したいと願われています。

そして主は、そのことを成し遂げるために御力を現してくださいませ。神はこの目的のために、私たち一人一人を祝福し、用いられたいと願っています。「私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。(エペソ 2:10)」主が、あらかじめ用意してくださっているのです。だから私たちがしなければいけないことは、願うことです。「どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、(エペソ 3:20)」私たちが願うところに、主が惜しみなくその力と恵みを、私たちが願う以上に注いでくださるのです。

そしてここで大事なものは、誰に御力を現してくださるか、であります。「その心のご自分と全く一つになっている人々」であります。ここで大事なものは、「心」です。ダビデは全き心を持っていた、とあります。そしてアサ自身が、15章 17節で、彼の心が主と全く一つになっていたとあります。完全であるとか、全き者というのは、必ずしも完璧だということではありません。前回の午前礼拝で学びましたが、心を主を求めるために定めること、心というのは行為以上に、自分の存在であるということ学びました。

ダビデも数多くの過ちを犯しました。彼はバテ・シェバについて以外は、神から悪く評価されたことがありませんでした。数多くの過ちを犯したにも関わらず、なのです。何がバテ・シェバの時に間違っていたのか？それは、神の恵みによって生きることをせず、妻を自分の手で奪ったからです。それまで過ちを犯しても、神の恵みに拠り頼むことから離れませんでした。神の恵みに生きるのではなく、アサと同じように自分の策略で、自分の力で、自分の知恵で動いたところ、主に拠り頼まなかったところが、彼の汚点だったのです。

私たちはあまりにも、行為に目を留めがちです。クリスチャンとしての行儀良さが、神が良しと認められる物差しだと思っています。神が良しと認められるのは、あくまでもイエス様に全幅の信頼を寄せていきるところにあります。神はこれだけで喜んでおられます。これだけで祝福してくださいませ。イエス様の心を、思いを尽くし、心を尽くし、力を尽くして知っていこうとする情熱が、神が求めておられる私たちのいけにえなのです。そのことが分かれば、例えば礼拝出席を遵守しなければいけないという規則がなくても、主をあがめたいと願うので、それを最優先にしようします。そして、兄弟を愛したいと願うから、奉仕を強制されなくても、自ら行いたいと願うのです。自分の手を汚して、人々の足を洗って、仕えたいと願うから、自ずと、当然のごとく、教会の礼拝とその奉仕に携わるのです。

自分ができていないと感じたら、ただ悔い改めればよいのです。神は私たちを責めることなく、ただ待っていてくださいませ。それでもできない、と嘆くなら、それでも忍耐して待っていてくださいませ。要は立ち上がるのです。そうすれば、主はご自分の力を惜しみなく現してくださいませ。私たちは、どうしても横道にそれてしまいます。永遠に残るものだけのために働けばよいのに、一時的な事柄に心を寄せて、それを行ってしまいます。主の心を知って、それだけに専念する、全き心、一つの心を持てるよう祈っていきたいです。

16:10 すると、アサはこの予見者に対して怒りを発し、彼に足かせをかけた。このことで、彼に対し激

しい怒りをいただいたからである。アサはこのとき、民のうちのある者を踏みにじった。

アサの心がここまで変容してしまったのは、恐ろしいし、悲しいです。ダビデが持っていたあの謙遜な心が必要です。ナタンに罪を指摘されて、「罪を犯した」と告白した心が必要です。レハブアムでさえ、エジプトの王シシャクが攻めてきて、それが主の律法を捨てたからだと言われて、「主は正しい」としてへりくだったのです。

16:11 見よ。アサの業績は、最初から最後まで、ユダとイスラエルの王たちの書にまさしく記されている。16:12 それから、アサはその治世の第三十九年に、両足とも病気にかかった。彼の病は重かった。ところが、その病の中でさえ、彼は主を求めることをしないで、逆に医者求めた。

足の病気にかかったのは、これは神の裁きであり、かつ憐れみです。神に呼び求める機会を神が与えてくださいました。けれども、それさえも彼は拒みました。彼は、主ではなく、それ以外の肉のもの、物理的なものに拠り頼みました。これが教会で起ると霊的に致命的です。すべての決断を主の前に持っていくこと。すべての事柄を、キリストを頭として主の前に持っていき、そしてその命令に従うこと。このことを見失ったら、教会は形は残るかもしれませんが、中身は何もなくなってしまいます。

ちなみにここで、医者に診てもらったことが悪いことではありません。主を求める代わりに医者求めたところが咎められています。私たちが病にかかった時に、主を求めているでしょうか？ここです、すべての思い煩いや重荷を主の前に持っていくのです。いや、自分でやっていくよ、と言わずに、持っていくのです。願うのです。それを神は願っておられます。

16:13 アサは、彼の先祖たちとともに眠った。すなわち、その治世の第四十一年に死んだ。16:14 そこで、人々は、彼が自分のためにダビデの町に掘っておいた墓に彼を葬り、香料の混合にしたりして作ったかおりの高い香油や香料に満ちたふしどに彼を横たえた。そして、彼のために非常にたくさんの香をたいた。

アサはその生涯のほとんどを、全き者として生きました。それで、民から非常に大きな信頼と尊敬が寄せられていました。それで、埋葬もこのように威厳ある葬儀を行ってもらいました。

4A 持続的復興 17

そして、アサの失敗の後、その子ヨシャパテが新たな宗教改革に取り組みます。

1B 異教からの防御 1-9

17:1 そこで、彼の子ヨシャパテが代わって王となり、イスラエルに対して勢力を増し加えた。17:2 彼はユダにあるすべての城壁のある町々に軍隊を置き、ユダの地と、彼の父アサが攻め取ったエフライムの町々に守備隊を置いた。17:3 主はヨシャパテとともにおられた。彼がその先祖ダビデの最初の道に歩いて、バアルに求めず、17:4 その父の神に求め、その命令に従って歩み、イスラエルのしわ

ざにならわなかったからである。

ヨシャパテは、その治世の初めにここに書かれてあるように、父アサが攻め取ったエフライムの町々の強化に務めました。イスラエルには、バシャ王朝が終わり、その王朝もヤロブアムの後を継いでいてかなり悪かったのですが、オムリが王となってからはこれまでになく悪くなりました。そしてついにオムリの息子アハブが王となった時に、金の子牛信仰に加えて、シドンからのバアル信仰が妻イゼベルを通してイスラエルに入り込んでいたのです。ヨシャパテは、エフライムの町々を強固にしたのは、その軍事的目的のみならず、霊的な悪い影響がそこに入っていくようにするためだったのかもしれませんが。けれども次回学びますが、非常に不可解なことをヨシャパテはするようになります。アハブと仲良くなることです。

17:5 そこで、主は、王国を彼の手によって確立された。ユダの人々はみなヨシャパテに贈り物をささげた。彼には、富と誉れが豊かに与えられた。17:6 彼の心は主の道にいよいよ励み、彼はさらに、高き所とアシェラ像をユダから取り除いた。

父アサの治世の始まりと似ていますね。主がアサには安息を与えられましたが、彼はさらに主に拠り頼みました。同じようにヨシャパテは、安息に加えて豊かさを与えられました。かつて、ダビデには安息を与え、ソロモンに富を与えてくださったように、神はアサに安息を与えられ、ヨシャパテには富を与えられました。

そしてアサが最初の時がそうであったように、祝福されたら、ますます主の道に励んでいます。これが、御霊の流れに導かれることです。主が祝福します。そして、それが御霊の現れであることをさとり、ますます主に献身します。おごることなく、むしろへりくだって主を求めるのです。

17:7 それから、彼はその治世の第三年に、彼のつかさたち、すなわち、ベン・ハイル、オバデヤ、ゼカリヤ、ネタヌエル、ミカヤなどを遣わし、ユダの町々で教えさせた。17:8 また、彼らとともにレビ人も同行した。すなわち、シエマヤ、ネタヌヤ、ゼバデヤ、アサエル、シェミラモテ、ヨナタン、アドニヤ、トビヤ、トブ・アドニヤなどのレビ人である。それから、彼らとともにエリシャマ、ヨラムなどの祭司も同行した。17:9 彼らはユダで教えた。すなわち、主の律法の書を携えて行き、ユダのすべての町々を巡回して、民の間で教えた。

ここがヨシャパテの、アサよりも優れたところです。それはユダの民に律法を教えたことです。アサは、律法を守るようにという通達をユダの民に与えましたが、その律法が何を言っているかを実際にレビ人と祭司たちに教えさせたのがヨシャパテです。これが、霊的復興が持続するための秘訣であります。使徒の働きを見ますと、使徒たちは福音を宣べ伝えています。そして主に留まるように、という勧めを行っています。そして、教えているのです。宣べ伝え、勧め、教えていく。これを使徒たちは絶えず行っていくことによって、主のことばがますます広がっていきました。これが、キリストの教会が神から命じられていることです。だから私たちは、福音伝道をするだけでなく、聖書を教えるのです。このことによ

って、救いの体験をして、その喜びを御言葉によって持続することができるのです。

2B 他国からの信頼 10-19

17:10 そこで、主の恐れが、ユダの回りの地のすべての王国に臨んだため、ヨシャパテに戦いをしかける者はだれもなかった。17:11 また、ペリシテ人の中から、ヨシャパテに贈り物とみつぎの銀を携えて来る者があり、アラビヤ人も、彼のもとに羊の群れ、すなわち、雄羊七千七百頭、雄やぎ七千七百頭を携えて来た。

ヨシャパテの力は、ユダ国内のみならず周辺諸国にも及びました。贈り物をペリシテ人も、アラビヤ人も行っています。完全数である七のある頭数が印象的です。これはソロモンの時と同じで、その王国は世界の国々の贈り物によって成り立っていました。

そしてアサの時と同じくヨシャパテを敵から守ったのは、自分ではなく主ご自身の恐れでした。ここが、主からの来る権威とそうではない人間の権威との違いです。ある人は影響と管理の違いとも言っていました。霊的権威は影響を与えます。人間の権威は管理もしくは支配します。そして霊的権威は、その人が主を恐れ、主に従っているからこそ付いてくるものであり、それがここでの「主の恐れ」です。

17:12 こうして、ヨシャパテはしだいに並みはずれて強大になり、ユダに城塞や倉庫の町々を築いた。17:13 彼には、ユダの町々で多くの工事があり、エルサレムには勇士である戦士たちをかかえていた。17:14 彼らの父祖の家ごとの登録は次のとおりである。ユダでは、千人隊の長たちは、隊長アデナ。その配下には勇士三十万人。17:15 王の指揮下に、隊長ヨハナン。その配下には二十八万人。17:16 その指揮下に、みずから進んで主に身をささげたジクリの子アマスヤ。その配下には二十万人の勇士。17:17 ベニヤミンには、勇士エルヤダ。その配下には、弓と盾を持った者が二十万人。17:18 王の指揮下に、隊長エホザバデ。その配下には十八万人の武装した者。17:19 これらは、王がユダ全国にある城壁のある町々に配属した人々とは別に、王に仕えた人々であった。

歴代誌は、レビ人と祭司の活躍を詳細に記していますが、同じように軍事的力もこのように記しています。けれども、間違っはいけないのはこの軍事力に王が頼っていたのではなく、あくまでも付いて与えられたものです。主に自分自身を捧げる王だからこそ、このような精鋭部隊が与えられていました。16節には、自ら進んで主に捧げた、その霊的な献身のゆえに勇士になった者もいます。こうして、ヨシャパテの治世は快調でありました。次回、18章からヨシャパテの最大の弱点、その不可解な行動を見ていきます。

アサの治世を眺めて、いかに主に拠り頼むことが難しいかを思わされます。人にある欲の一つが「高慢」あるいは自慢であり、これを主は「高ぶる目」を忌むべきものの筆頭に挙げておられます(箴言6:17)。小さなこと、些細なことであっても、主に拠り頼むという謙虚さが必要です。祈っていないというのは、一番大きな高慢の一つでしょう。祈らないことによって、主の御心が自分を通して行われぬ、自分が主の御心を妨げていることさえあります。祈らないことによって、主がなされようとしていること

が行われずに、自分の契約、自分の思惑、自分の義によって事を進めていることはないでしょうか。また、自分が最もできていると思っていることはつまずき倒れる、一歩手前にあります。パウロは、自分が弱いときこそ強いと宣言しました。弱さにキリストの力が完全に働くからです。自分ができると思って、それで行っているものは、まさに主ご自身ではなく、人間やこの世のものに頼っているのです。

最後に二つの御言葉を聞いて、終わりにしたいと思います。「ただこれだけをあなたがたから聞いておきたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行なったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。(ガラテヤ 3:2-3)」御霊によって始まったのに肉によって完成してしまいました。だから、使徒パウロはこのように勧めます。「もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。互いにいどみ合ったり、そねみ合ったりして、虚栄に走ることはないようにしましょう。(5:25-26)」御霊によって生きるなら、そのまま御霊に導かれて進みます。